挨拶

あおもりの川を愛する会　会長　佐々木　幹夫

総会開催の形式について

世界中の人がいまコロナで大変な時期を迎えております。皆様、いかが御過ごしでしょうか。例年、一堂に会して実施している定期総会も変更を余儀なくされました。ここに、提案するように、皆様に議案書を送付します。確認後、同封のはがきにて皆様の判断を頂く票決の方法で本年度令和 2 年度の総会を開催することにします。ご理解、ご協力宜しくお願いします。

ウィルスの名称について

日本では「新型コロナウィルス」と厚労省が言い始めたことからこの言葉が使われていますが、何が新型なのかこの言葉からは読み取れません。世界的にはこのウィルスによる感染症を｛Covid-19｝[注1)]と言うようになっています。これは WHO が今年の 2 月に今回のウィルス感染症を「Covid-1９」（コビット　ナインテーン）と命名したことから定着してきたもので、当初は今回ウィルスを Covi-19、このウィルスによる感染症を Covid-19 と使い分けていましたが、今ではこの言葉の前後の言い方により、Covid-19 といったときそれがウィルス名を意味したり、新型ウィルス感染症を意味したりしております。我々が単に「コロナ」といったときにそれがウィルス名を指してり、ウィルス感染症を意味したりするのと同様の使い方です。これからの私のコロナの言い方もこのような意味を持たせて使います。なぜならば正確な言い方をすると冗長になるからです。学術的には、今回のウィルス名は「SARS－CoV-2」[注2)]（サーズ　コビ　ツー）で正確に伝わると思います。CoV-2 は２番目のコロナウィルスの意味であり、SARS はこのウィルスを形容している感染学的英単語の頭文字をとった略語であり、形容詞的用法となっています。一般の人にもっと分かりやすい言い方をするならば、悪に、普通の悪、その上の極悪、さらにその上の超極悪の３種類があるとき、SARS はこの３種の中の超極悪に相当する意味となっており、SARS－CoV-2 は超極悪なコロナウィルス２型というウィルス名となります。

注１）　Co はコロナ corona、vi はウィルス virus, d は感染症 disease,　19 は 2019 年を意味しており、このウィルスは２０１９年 11 月に初めて発見されています。

注２）S は Severe　重症、A は Acute　急性、R は Respiratory　呼吸器、S は Syndrome 症候群の頭文字をとれば、SARS となり、CoV－２の Co は Corona　コロナ、V は Virusu ウィルス、２は２番目を意味している。

コロナ感染の特徴

このウィルス感染は中国武漢で最初に確認されています。武漢にはウィルス研究所がありますが中国側はここの職員が最初の感染者であることは認めておりません。しかし、武漢市の中で最初の感染クラスターが発生していることは認めています。最初は十数名だった感染者が世界に広まり、今や世界では２６０万人を超える感染者となり、死者も２０万人を超える勢いで増え続けています。日本では感染者の死に目に家族は会えず、死ねば家族も顔会わせもできずに直ちに火葬場に送られ、骨となって納骨箱に入り家庭に帰ります。志村けんさん、可哀相でした。しかし、今日、我々はこのウィルスに立ち向かわなければならなくなっています。孫子の兵法に「彼を知り己を知れば百戦してあやうからず」なる教えがあり、コロナの実情をしり、人間の実情を知ればコロナに敗れることはないことになります。

コロナの弱点

ものすごい勢いで感染が広まっており脅威であります。果たしてこのウィルスに感染力はあるのか、コロナに足や羽があるのか、そう答える学者はいない。だから、コロナ自体は自分で移動することはできない。これがコロナの弱点である。ウィルス感染は人間が吐き出す飛沫やコロナが潜んでいる水分に接触することにより広まっている。感染のエネルギーを与えているのは人間である。コロナが潜んでいる水分等の移動現象を作り出しているのは人間である。これが敵と己の実情であり、ここに基づき対処すれば戦に敗れることはない。あおもりの川を愛する会の事業実施に参加条件を付すのは孫子兵法の教えに沿ったものであります。感染で亡くなった死体のそばによっても感染者の表面を消毒しておけば接触感染は起きないし、死んでしまえば飛沫を出すこともないので飛沫感染も生じないものと考えられます。医師や看護師の接触訓練が叫ばれているが葬儀屋の訓練も必要ではないかと考えています。

未来について

コロナ、正確には Covid-19 の治療薬およびワクチンの開発は急がれます。また、抗体解明の研究も急がれます。これらの研究に関連する学者や研究者にはもっとお金を出したいものです。予算は研究の実績や身分に応じて出すのではなく、調査研究の意欲があるのかどうかで出したい。今、仮に１００億円出したとして、結果的に正しい治療薬やワクチンの開発に１億円しかかかっていなかったとしても９９億円は無駄にはならない、９９億円の失敗があったから治療薬とワクチンの開発ができるのであります。学術的な研究とはこのような９９％の無駄があり、この失敗がなければ成功はありえないのです。このような政策があれば我々には未来があります。

イギリス、アメリカ、日本においてワクチンの開発が発表されており、イギリス政府は大々的にワクチンの臨床実験に入ることを公表しています。未来は近いです。

行事実施の基本的な考え方

行事実施の基本的な考え方を明確にしたいと思います。行事への参加者がコロナに絶対に感染しないこと、コロナ感染の新たなクラスターをつくらないこと、これが行事実施の基本的な考え方になります。私に来た英文の手紙に今のコロナ対応にぴったりの言い方があるので紹介します。事の実施や中止の判断は、「to keep people away from an uncontrollable situation.」よりなる。すなわち、「コロナ感染防止対策をとれないような状況に参加者を置かないこと」により、事の実施や中止を決めるという考え方です。英語的な言い方で日本語にはこのような言い方はないです。行事を実施するにしてもコロナ保持者が何名潜在しているのかが問題になります。

慶応大学付属病院の調査では、コロナに関係ないと思っている患者でも６％の人が感染しています。すなわち、病院側がコロナ患者以外の手術前患者や入院患者の計 67 人にＰＣＲ検査を実施したところ 4 人が陽性となり、６％の患者がコロナにかかっていたという結果がでています。さらに良い参考値を得るためには、一般市民を対象に無作為抽出によりＰＣＲ検査を行うとよいのですが、たとえ実施したとしても、ＰＣＲ検査の陰性判定には誤差があり、それは大きいので判断の基準になる値は出てくるとは思われません。慶応大学の調査結果に従えば、今の東京では 100 人中 6 人がコロナウィルス運搬者として潜在していることになります。良心的に、東京の人は無意識のうちにコロナ運搬者となって感染を広げている、と考えたいものです。さて、青森県の場合、潜在的なコロナ保持者の割合、これを x と記、をどのように設定すべきか。次のように考えられます。

青森県　x；潜在的なコロナ保持者の割合　＝３％

この値３％には科学的な根拠はなく、幹事会で出た意見をすべて網羅できるように調整して得た結果であります。岩手県の場合は　x；潜在的なコロナ保持者の割合　＝限りなく０％に近いし、東京においては　x；潜在的なコロナ保持者の割合　＝６～１０％　（ここに、１０％は感染発生者推移より判断して）として良いと思われます。青森県でも行事実施担当部局が消極的な時は x ＝10%とします。これにより以下のように事業の実施が考えられます。

参加者が 34 名以上の行事；参加者が 34 名でコロナ保持者が 1 名となるので、中止か延期。したがって、34 名以上の参加者が見込まれる行事は中止か延期となります。

参加者が 20 名程度になる行事；コロナ保持者はいないが発生確率 0.6 人のため少し厳しい参加条件で実施。

参加者が 10 名程度になる行事；コロナ保持者はいないが発生確率 0.3 人のため参加条件を付して実施。ただし、行事担当者の意向が重要な時は x ＝１０％となるので 1 名のコロナ感染者発生になるため中止となります。

参加条件

１．この２週間以内において海外渡航者と濃厚な接触をしていないこと。

２．この２週間以内において県外在住者と濃厚な接触をしていないこと。

３．家族に 37.5 度以上の熱を出している者がいないこと。

今回のコロナ感染拡大の経過より判断して、東京で感染者が発生している限り、x は 0 にはなりません。今やコロナ諸悪の元凶は東京となりつつあります。

会の活動と人類の発展のために

我々は川を中心に自然を体感し、そこで知りえた情報を友に発信し、いつまでも良い川を後世に残そうとしています。これは人類の発展にそっています。人類は科学技術の発展を誇大視し、自然を汚し、自然を破壊してきましたがすでに公害病等により罰を受けてきました。これは自然界、生態系の理に反していたからです。自然界においては 1 つの種が君臨することは許されていません。互いに敵同士でも共存、共栄が基本となっているからです。ライオンが人を食うからと言ってライオンを絶滅して良いとする行為を自然は許さないのです。あおもりの川を愛する会の活動はいつまでも川を大切にしてもらうことを目的にしている以上、人類の平等、生き物同士の平等、生き物と無生物間の平等を確立しようとする方向の動きになっており、これは人類発展の方向に一致しています。しかし、今回、コロナの猛威は自然界の理に反しています。1 つの種が生態系を君臨することは許されていません。外来種が一時的に凌駕を極める時があります。しかし、やがて衰退しています。他の生物がコロナとどのような戦いを始めているのかは知る由はありませんが、我々は遠方より友が来るなら迎えて手を握り、ハグし、語り合いたいからコロナと戦うしかないです。咳もクシャミも体が必要としているから出ます。この自然を早く取り戻したい。人類発展のためにも、できる範囲で会の活動を繰り広げていきたいものです。

コロナの影響が大きいためにコロナについて長く語りましたが私の専門の立場からコロナを物質移動論から見てきました。私の専門は流体力学ですが、この 20 年間、河川生態学術調査研究を生態学の専門家の先生方と一緒に続けてきました。この中で培った生態学の知見からコロナ対応を判断しています。コロナとの戦いは全面的であり、医学や感染症学的な対応だけで収まるものではなく、各学問分野の連携を深めた戦いが必要と考えております。

最後になりましたが、会員の皆様のご健康、ご発展を祈念してあいさつとします。

２０２０年４月吉日